

佐久市 地域おこし協力隊 活動報告書

〔3年任期満了最終版〕

石田 諒

【ミッション】 工芸・民芸・書などの特産品等の開発支援等（望月地域）

【委嘱期間】 2016年（平成28年）4月1日～2019年（平成31年）3月31日

① ミッション詳細

募集要項書類より抜粋

隊員の活動内容等

地域名等：NPO法人未来工房もちづき

No.	項目	内容
1	隊員の導入を希望する理由（地域の課題等）	望月地区は町村合併後 10 年で人口が 11.7%減少した。少子化と高齢化で、地域コミュニティが衰退していく心配がある。望月地区が培ってきた産業や文化・伝統を生かして、文化振興や特産物開発などに取組、新しい雇用や移住を促進したい。
2	地域の将来像（どういう地域にしたいのか）	工芸品民芸品・書・民話伝承など地域資源を継承させ、文化の薫り高い地域をつくりたい。若い人たちが活発に活動できる場を広げ、農村特有の豊かな暮らしを築き、過疎から脱却したい。
4	隊員の具体的活動内容	<p>1 地域資源を生かした工芸・民芸・書などに関連した特産品開発企画や製作者の掘り起こし、地域と連携した土産品等開発支援活動 (活動見込 30%)</p> <p>2 中山道沿いの空き家等を利用した特産品や土産品等の展示販売に関する企画・展示場開設支援活動 (活動見込 30%)</p> <p>3 地域研究・講座・研究会・地域イベント等の企画・開催 (活動見込 20%)</p> <p>4 地域の特産品等の販売促進に向けた情報発信（SNS等を活用した特産品や観光土産等の情報発信や情報誌発行など） (活動見込 20%)</p>
5	隊員の活動範囲	関係区名：望月地区
6	期待する隊員の人物像	地域住民の一人として、楽しく活動できる人。 民芸・工芸などに関心がある人
8	隊員に対する地域のサポート方法	地域の多くの人たちを紹介し、隊員と住民の共同研究会を常設し、お互いに案を出し合い、住民と共同で企画し、共同で事業を進める
9	隊員に対する地域と関係団体及び市の役割区分	<p>地 域：隊員を中心に多くの住民と常時研究会を開催し、特産品開発や販売に取組む。</p> <p>関係団体：NPO法人未来工房もちづき・多津衛民芸館。未来工房や多津衛民芸館の資料などを提供し、自由な研究を支える。 共同の研究会に積極的に参加する。</p> <p>市：企画などの協議、事業の共催など</p>
10	任務終了後の地域への定住についての考え	3年間で新しい事業を起こし、ぜひ定住できるよう、全面的に支援する。
15	募集における制限等（年齢、性別）	40歳以下を希望する。 男女はどちらでも歓迎。
16	その他の必要な事項（資格等の条件）	自動車普通免許

② 各年度の記録

1年目 — 2016年（平成28年）4月1日～2017年（平成29年）3月31日

課題：自分が地域のことを知らない、地域が自分のことを知らない。

課題解決へのアプローチ：地域の人・こと・モノに積極的に関わる。

【概要】

2016年度より、佐久市でも地域おこし協力隊制度の導入・運用が始まり、記念すべき第1期生6名のなかのひとりとして委嘱を受けた。「各自、担当の活動地域に居住する。」というルールのもと、佐久市役所望月支所の徒歩圏内にあるアパートを借り、人生初の地方・中山間地域での生活をスタートさせた。

1期生6名のうち、4名が望月地域の担当。その4名全員が20代という若さだったこともあり、若年層の都市部流出・高齢過疎化の著しい望月地域において非常に明るい話題となった。同時に、協力隊に対する過度な期待と誤解があったことも忘れてはならない。あらゆる意味において右も左もわからない状態。まずは地域との双方向の信頼関係構築につとめ、住民の方から誘われごとや頼まれごとがあれば、断らずに時間をかけて対応した。

地域おこし協力隊制度においては、隊員は役場ないし活動地域の支所や行政関連団体の所属となる。しかし、望月地域では「世話人」方式を採用しており、籍のみ行政側に置き、実際は市民団体への完全出向という勤務実態となった。このため日々の業務は、協力隊の募集・受け入れ市民団体の活動・行事等の補佐を中心とした「まちの人員不足の無料補充役」という意味合いが強く、現行の勤務ルールにおいて協力隊の業務範囲か否かの判断に苦悩する場面が日々存在した。常識的に考えれば本来、応募者側には何の責任もないはずである。

協力隊本人・市職員・関係地域住民、3方向それぞれの立場で「地域おこし」や「業務範囲」に対する考えや方針が激しく衝突することも多かった。第1期の委嘱直後に発生した退職トラブルは、その後の協力隊の運用環境に明らかな悪影響を及ぼしており、いまだ解決の目処は立つことがない。こうした事実や問題点は、今後の佐久市における協力隊制度運用の課題解決と良き発展のため、積極的に調査・提案・発信していく考えである。

【主な活動内容（下線の活動は次年度以降も継続）】

- ▶ NPO法人 未来工房もちづき への正会員入会（年会費は隊員の自己負担）
回団体の活動への参加、理事会・総会・部会への出席、自主事業への全面参画
- ▶ 多津衛民芸館 事務員兼イベントスタッフ
日本民藝協会『第151回 日本民藝夏期学校 佐久会場』現地実行委員会 企画準備・運営
民藝品・工芸品 展示即売会『六人展／夏の工芸展』 企画準備・運営（例年8月開催）
地域文化祭『平和と手仕事展』 企画準備・運営（例年11月開催）
クリスマスコンサート 企画準備・運営（例年12月開催）
- ▶ 書道大会『比田井天来・小琴 顕彰 佐久全国臨書展』 実行委員会 企画準備・運営・式典司会進行
- ▶ 長野県有機農業研究会『土と暮らしのオープンカレッジ』 イベント記録動画制作（3月4日）

【佐久市民としての私的な関わり・副業など（下線の活動は次年度以降も継続）】

- ▶ FMさくいだいら『JEWEL BOX KDC!!』 ラジオパーソナリティ出演 番組企画構成・演出
- ▶ 佐久市民ミュージカル ころのミュージカル『黄金の郷 ～市川五郎兵衛眞親伝奇～』 舞台出演（11月13日）
- ▶ 佐久市コスモホール COSMO☆アカデミア 舞台劇『天才バカボンのパパなのだ』 舞台出演（3月26日）

② 各年度の記録

2年目 — 2017年（平成29年）4月1日～2018年（平成30年）3月31日

課題：生活や業務に慣れたことで、補佐的な役割に物足りなさが生じる。

課題解決へのアプローチ：佐久市内外、東信全域に交友関係を広げる。

【概要】

2年目を迎え、地域との友好な関係性はある程度構築された。住民票を東京から移し、ひとりの佐久市民として実際に1年間。望月地域に居住したことで、各種イベントや四季の気候、土地の規模感や課題感覚などをひと通り体感することができた。協力隊の後輩も次々に委嘱され、人数が増えてきたことで職場環境にも変化が訪れた。同じ望月地域担当同士で相互のミッションを補佐しあうことは当然であると考えたが、募集要項の文言と勤務ルールに縛られ、思うように仕事に取り組めない場面が多々あった。

受け入れ団体・施設の活動や事業は委嘱初年度と同一で、まだ意見を積極的に聞き入れていただけの関係段階ではなかったため、補佐的な役割からの脱却には時間がかかるとの判断に至った。自主的な企画や、事業に発展可能な動きを展開するためには、新たなコミュニティやチームをゼロから構築することが必須と考え、行動した。

フェイスブック等の各種SNSを利用し、公私にわたり積極的な情報発信をすることで、自身の存在を地域に広くアピールすることが可能となった。生活面においては、初年度の委嘱直後に購入した中古車を最大限に活用し、佐久市内外・県内外を活発に散策した。「2段階ヨソモノ」の概念を発見したのもこの頃である。新しく同世代の友人をつくり、協力隊ではない一個人として地域と接し始めたことは、2年目の最大の成果かもしれない。

最長3年間の任期の折り返し時期を迎えると、地域から「定住するのか否か」という問いを投げかけられることが多くなった。「仕事だからこの土地にいる、先々の定住までは約束できない。そもそも定住とはなんだろうか、互いにそこから問い直していくべきだ。」という意見に賛否両論が巻き起こり、人間関係のトラブルに発展することも少なくなかった。しかしながら、そうした衝突が地域にとって必要な議論であったことは間違いない。許可を取ったうえでの副業が充実してきたことで、週29時間の勤務時間について関係者や担当部署への相談が必要となる場面も頻発した。総じて、2年目の後半から、退任後に向けての活発な過渡期に差し掛かったといえる。

【主な活動内容（下線の活動は次年度以降も継続）】

- ▶ 中山道望月宿 地域拠点『ますや』プロジェクト 参画
- ▶ 長野県『信州で始めるあなたのお店応援事業』中込商店街空き店舗見学会 企画準備・運営補佐
- ▶ 『信州古民家再生プロジェクト』共同代表として活動範囲拡大 イベント企画・運営・古民家紹介
- ▶ 合唱団『望月の駒を歌う会』委嘱直後より入会／第6回定期演奏会 出演（11月12日）
- ▶ 協力隊望月地域別担当の企画補佐・イベントの記録撮影・PR動画制作

【佐久市民としての私的な関わり・副業など（下線の活動は次年度以降も継続）】

- ▶ ダンスクラブKDC 本公演『JEWEL SHOWCASE 2017』ダンス出演（5月14日）
- ▶ フリーペーパー『農を楽しむ暮らしマガジン 畑々 Patapata』市民の方々と創刊 編集・発行
- ▶ 第1回 地域密着 魅力発見系ソーシャルマラソン『佐久シャルソン』 参加（9月30日）
- ▶ ポートレート・プロフィール写真撮影／市内イベント企画サポート・記録撮影
- ▶ 発展型！招待制講座シリーズ“ヨソモノ”×地域で創る、ふるさと佐久の魅力と可能性 ゲスト登壇・運営

② 各年度の記録

3年目 — 2018年（平成30年）4月1日～2019年（平成31年）3月31日

課題：任期満了後の進路と立ち位置を検討・決定しなければならない。

課題解決へのアプローチ：県内全域に目を向ける。起業と就業を両立。

【概要】

2度の契約更新を経ての最終年度。これまでの活動リソースを活かした仕事にエネルギーを注いだ。そのひとつとして、望月地域で過去に開催されていた自主勉強会のアップデート企画『望月アレコレ大学』がある。地域の歴史文化についての連続的な学びの場を創設することで、自分たちが暮らす土地についての認知と発見を促した。スタートアップと初期企画に関わり、現在は運営の全権限について、望月地域に置いた事務局に譲渡済みである。過去の出来事や地域の文化事象をフックに、世代間交流の場としても未長く機能・継続していくことを願う。

同期や後輩らの活発な尽力もあり、委嘱から2年半ほど経過した頃になってようやく、人員横断的な動きが可能となった。自主企画も以前より進めやすくなり、協力隊の仲間ひとりひとりのスキルを最大限に活かして、地域の本当のニーズに応えられる機会が増えていった。周囲に「卒業制作みたいだね」とも称された映像作品『味噌神家の一族』は人員横断的な動きの最たる例であろう。同作品は、映像コンペティションである「ふるさとCM大賞NAGANO 2018」でアイデア賞を受賞し、最終審査会では会場の話題と注目を大いにさらった。

前年度に立ち上げた『信州古民家再生プロジェクト』の活動も軌道に乗り、東信の各地に出向きイベント企画を連続で実施。協力隊の勤務の外側では、フリーペーパー『畑々Patapata』の編集部と、長野県立大学 ソーシャル・イノベーション創出センターの地域コーディネーター東信担当を兼任。また、協力隊活動を通じて知り合った方々と、企画会社・ミリグラム株式会社を起業。1期生として、佐久市地域おこし協力隊の存在を各方面に周知・広報したばかりでなく、現役時・退任後のロールモデルの構築にも大きく寄与した。

協力隊の役割において最も重要なのは、人と出会い、関わり、その関係性から熱量と価値を生み出すこと。それらを日々、怠らなかつたひとつの目安としてあげられるのは、フェイスブックの友人数だ。2016年4月の委嘱当初は300人程度だったその数は、2019年3月末現在1550人を超えている。1年が365日であることを考えれば、これは脅威的な増加数である。大きすぎるほどの資産を、今後も有効に活かし合っていきたい。

【主な活動内容（下線の活動は退任後も継続）】

- ▶ 地域歴史文化連続講座『望月アレコレ大学』市民の方々と立ち上げ 事務局・企画準備・運営
- ▶ 東京都世田谷区・松陰神社駅前 ローカルセレクトショップ『Gokigen3』出店サポート
- ▶ 望月小唄誕生90周年記念 望月小唄まつり 企画準備・当日司会進行（7月8日）
- ▶ ボランティア全国フォーラム軽井沢2018 分科会『人を動かし、地域も動かす“5つの気”』講演（11月4日）
- ▶ ふるさとCM大賞NAGANO 2018 映像作品『味噌神家の一族』 企画・制作／アイデア賞受賞
- ▶ ミリグラム株式会社 起業 代表取締役社長 就任（11月29日）

【佐久市民としての私的な関わり・副業など（下線の活動は退任後も継続）】

- ▶ 長野県立大学 ソーシャル・イノベーション創出センター 地域コーディネーター 東信担当
- ▶ 中込商店街『柏屋旅館<シェアハウス&ゲストハウス>』柏屋映画部 主宰 上映会企画・運営
- ▶ 関東在住の友人・知人に対する佐久エリアの観光案内や移住相談

③ 全体総括と今後の展望

～佐久市での協力隊活動を終えて思うこと～

▶ 立場と勤務ルールの再整備・改善を！

制度導入から3年が経過し、初の任期満了者が4名出ることとなった。その全員が佐久市内に残り、起業や起業予定、または就業、という最終結果である。委嘱直後に2名の退職者が出た第1期においては、この最終結果については「よかった」と判断することが妥当と考える。だが、その結果のみを見て成功例と評するのは危険である。

1期生以降も比較的安定したペースで協力隊の採用が行われ、市内の全域にその活動範囲と好影響が行き渡る兆しが見え始めたように感じる。しかしながら、佐久市地域おこし協力隊を取り巻く労働環境は、お世辞にも「はたらきやすい」ものとは評価できない。これは協力隊サイドだけではなく、運用・管理を行う佐久市正職員側にとっても同じことである。

長野県内のある自治体では「協力隊の存在は自治体職員というよりも、自治体から委託された個人事業主に近い存在。仕事をお願いしているカタチだが、まったく別の土地から単身で地域に入り込み、何かを成し遂げることは非常に難しい。自治体は協力隊の仕事を全力でサポートする役であり、その義務がある。」と、明言している。勤務についても、規定時間を過不足なくきっちりこなすことが重要とされるルールではなく、個人個人の裁量を重視した柔軟なものが採択されている。あくまで個人的な調査事実であるが、その自治体で活動する協力隊たちからは、勤務環境や職場関係についての不満を耳にすることがまったく、無い。これは驚愕に値すると表現したい。

佐久市の場合は、行政の非常勤職員の勤務ルールにのっとり運用がなされており、協力隊においてもいわゆる「公務員らしさ」が重視される傾向にある。これが「はたらきづらさ」や、協力隊本人・市職員・関係地域住民それぞれの「認識のズレ」や「不信感／不満感」を生み出すひとつの原因となっているとご理解いただきたい。

協力隊制度を導入し、人員を増やすことで正規職員の負担が増えていることも紛れもない事実である。協力隊と1対1の担当職員、その相性で活動の明暗が決まる。といった人材管理方法が双方にとって本当に幸福な関係性であるのかどうか、協力隊・市職員および関係者からの綿密なヒアリングと改革を実施すべきである。

実際に最前線で現場を経験し、情報も豊富に入手している者の意見が建設的に聞き入れられ、改善に向かうことを強く願う。そうでなければただ、互いの関係が疲弊していく暗黒の未来が待っていることだろう。

協力隊として過ごした3年間がどうだったかを尋ねられた際、その生活体験の感動や仕事の成果よりも、まず労働環境に関する改善点が真っ先に頭に浮かんでしまうことは、ただただ悲しいとは思わないだろうか。素直に明るい話題を報告したい気持ちは、誰にとっても当然の感情である。争いたいわけでは、決して、ない。

協力隊を採用し実際に地域へ出て仕事をしてみようことで、市としてどのような効果を期待するのかを明確にし。正職員が手を出せない部分、または得意としない範疇を担う役として、協力隊各自のスペシャルな能力を正しく「価値」として認め、適切に運用・評価できる環境が1日でも早くつくられることを渴望する。

▶ 「本当の豊かさ」への、問いと気づき。

以下、最終報告書としては不相应かもしれない抽象的な感想を述べる。

この3年間という時間と空間は、自分にとって壮絶すぎるほどの重要な体験装置であった。人生における「本当の豊かさ」や「こころ良い暮らし方」について、心身に痛みを伴いながら真剣に向き合った1095日。

あの分断以前のまま、生まれ育った東京で暮らしを続けていた場合、「植え込まれた虚構の価値観」と「巧みに隠された日本の現実／将来像」に生涯、囚われ続けていたのかと考えると、それは恐怖そのものである。見せられていた夢から覚め、過酷ながらも確実に、より良き方向への羽ばたきを会得した一個体。世界の未来と日常を担うちっぽけなひとりとして、今後も問いと気づきをアレコレと繰り返していきたい。